国際芥川龍之介学会 ISAS　第 4 回研究集会　印象記

小澤　純

第 4 回研究集会は、神奈川近代文学館を会場に、2023 年 3 月 5 日（日）午後 1 時 30 分からハイブリッドで開催された。研究発表 1 本に研究集会運営委員会企画「研究を聞く」1 本という構成で、発表時間のみならず質疑応答や議論のための十分な時間的余裕もあり、会場とオンライン上のやりとりが交錯する貴重で有意義な場となった。以下、印象深かったことを書き留めておきたい。

落合修平氏による研究発表「価値喪失と追憶　保吉物をめぐって」は、芥川文学の転換期として認知されながらも高く評価されるわけではなかった「保吉物」について、繊細なテクスト解釈を積み重ねて一貫性のある全体像を提示した。落合氏にはこれまで綿密な資料踏査の上で美学的見地から後期テクストを照射した大きな実績があるが、今回の発表では対照的な方法をあえて採用し、いわば同時代の評者に始まる百年の誤読の軋みを、一つ一つ丹念に読みほどき整調しながら、潔くテクストの水準に集中して価値転換を試みていった。特に、先行研究の細部から新たな解釈の可能性を再発見し、近年の医療人類学の知見を援用しながら「少年」と「少年続編」の各三章に〈追憶〉の反復構造を看取して、「保吉物」が〈些細なもの〉を通した〈切実なる価値探求の意志〉を宿すと捉える視点には、静謐な説得力があった。「保吉物」を〈喪失感〉や〈価値喪失〉といった帰結に落ち着かせるのではなく、むしろ〈生の価値を模索する〉プロセスに置き直す姿勢は、例えば後の「点鬼簿」において瀕死の「僕の父」が語る「些末な話」とも接続していくようで、本発表の作品史・作家論的射程の広さを実感した。落合氏には、これまで「海のほとり」「年末の一日」や「蜃気楼」などの晩年の創作と「詩的精神」といった評論の要所を聯絡する研究の蓄積があり、近年は researchmap 上で初期テクストから順次扱い、まさに創作行為と理念の推移を基軸とした精彩に富んだ作家像を構築しつつある。氏の丹念な実証と論証に、今回のような批評性を帯びた作品ジャンルの再審が浸透することで、作家の創作意識に肉薄する強度が研究史に刻まれていくのではないか。今後の進展を心から期待したい。質疑応答では同時代の子供観との対比や、シャルル・ルイ・フィリップとの類縁性、あるいは晩年の芥川文学の鍵語である「永遠に超えんとするもの」への繋がりなど、多くの示唆を得られる機会となった。テクストと真正面から向かい合う氏の姿勢に、会場の質問者から共感が寄せられる一幕が、記憶に残った。

運営企画「研究を聞く」では「芥川龍之介あれこれ」と題して石割透氏が登壇し、氏の長年にわたる芥川研究の軌跡と現在地を参加者が様々に共有し、開かれたままの問いを分有する場となった。縦横無尽な語りには迫力があったが、同一作品の創作集ごとのルビや読点の位置や頻度、誤植、さらに芥川自身が草稿・原稿に記したものとの差異や誤記の問題、そもそも誰がルビを振っているのか、誰が校正をしているのかなど、問いは尽きない。岩波書

店の『芥川龍之介全集』や山梨県立文学館の『芥川龍之介資料集』といった基本文献刊行、さらには近年の岩波文庫に深く関わってきた、いわば生き字引きである氏ならではの無数のミクロな視点が、芥川をめぐるテクストの環世界を露わにしていった。そして芥川の年ごとの作品の発表枚数、雑誌ごとの原稿料や印税、家族へも範囲を広げた収入の凡そなど、定量的に明らかにできるところまで周辺資料や他作家との比較や証言も交えて迫りつつ、分からない点についても同様に指摘して、自ずと〈芥川龍之介〉という近代作家の実像と虚像が揺曳する。芥川自身が晩年の諸テクストで語っていた自己像や親族像の再点検を促すようなデータも多く、質疑応答では経済状況と創作意識の相関性についてのやりとりや、居住地の調査、他作家の証言など、さらには世紀末芸術と共に歩んだ芥川文学の特質をめぐるマクロな議論が深まっていった。例えば石割氏は、晩年の芥川が養家での生活をみすぼらしく描く背景に近代的な芸術家意識を見出したり、データに拠りながら原稿料が高騰していく女性雑誌などへの掲載の多寡を吟味し周囲の作家とは異なる姿勢を示したりと、長年話題となりながらも具体的に論じる糸口が見出しにくかったトピックに新たな照明を当てる。様々な発言者との間で、谷崎潤一郎、宇野浩二、佐藤春夫、菊池寛などの固有名が行き交い、そのまま石割氏の最新単著『大正文学断想―芥川龍之介を核として―』の視界が想起された。また自死の理由に関する仮説など大胆な見解の応酬もあり、決して儀礼的な講演ではない、多様な世代や立場の参加者にも発言の機会が等しく開かれた研究集会の醍醐味が存分に味わえる場となった。

今回の研究集会では、特別企画として午前中に神奈川近代文学館のバックヤードツアーがあったことも忘れ難い。普段は入ることのできない書庫や作業場はまさに汗牛充棟と形容するに相応しい舞台裏で、寄贈者の大切な想いを引き受けた館員の方々の弛まぬ熱意とプロ意識を垣間見ることができ、文学研究者の端くれとしてかけがえのない資料を活用していくことの責任を強く感じた。以前に日本近代文学館や山梨県立文学館、藤沢市文書館のバックヤードを拝見したことがあったが、まさに館ごとの相貌が最も深く表れてくるのは、館員の知恵と努力の歴史が幾層にも積み重なり絡み合う分類棚や作業台、そして整理中の資料の山影であろう。コロナ禍が続いた約２年間、思うように足を運べなかった各文学館にあらためて向き合う意欲が湧いてくる濃密な時間であった。

国際学会として、オンラインを主とした大会や研究会には多くのメリットがあることは確かだが、ツアーのみならず、合間合間の来場者同士のちょっとした会話なども含め、ハイブリッドで開催していく重要性も再認識できた。無論、オンラインでしか参加できない方への配慮は常に必要であるが、文学館というトポスでの経験は、今後の開催地選びの参考になるように思えた。私は久し振りに会場組で参加したが、落合氏と石割氏の文学研究へのそれぞれの切実な想いのようなものは、声音や仕草、現場の雰囲気と共に今もありありと思い浮かぶ。まだ新型コロナウイルス感染症が５類に移行していないなか、大変な準備を進めて下さった研究集会運営委員のみなさまに感謝申し上げたい。